

歩み続けた 30 年

「青少年のための科学の祭典」は、参加型の科学体験イベントとして、毎年、全国各地で開催されています。その歴史は、1992年に東京・名古屋・大阪の3会場で始められたのがきっかけです。以後、東京の科学技術館では全国大会を、そして全国各地では地方大会が開催されています。

富山大会は、1994年に富山市立星井町小学校で第1回大会が開催されました。その後、毎年途切れることなく、今年で30回目を迎えました。本大会は、県内の小・中・高・大学の児童・生徒・学生・教職員、そして一般の方々が、理科や科学技術に親しみ、その楽しさや面白さを発見するきっかけになることを目指しています。また、趣旨に賛同する地元の企業や博物館・科学館等とも連携し、様々な組織や人々が協力しながら開催しています。お陰で毎年、30を超える実験ブースやワークショップ、ステージ発表等があり、今では全国大会に匹敵するほどまでに成長しました。

今年の会場となる黒部市吉田科学館では、第2回大会から4年毎に開催しています。ちなみに、富山大会は、会場を毎年変更することを基本にしています。コンパクトな富山県ではありますが、会場を固定してしまうと、遠方の子どもたちが来にくくなります。そこで、我々は、県内を概ね4地区に分けて、循環しています。吉田科学館では過去7回開催しており、今年で8回目となります。

さて、「10年ひと昔」という言葉がありますが、本大会は30年の歴史を刻みました。この間、教育を取り巻く環境は大きく変化しています。また、その変化のスピードは年々、早くなってきています。教育の現場では、つい数年前まで「主体的・対話的で深い学び」をどうするかという話題で持ちきりでしたが、時代はあっという間に変わり、コロナ禍も相まってタブレットを使ったICTを教育でどのように活用していくかに話題が変わりました。そして今は、生成AIが教育にもたらす影響について、学校はもとより社会全体で議論になっています。とは言え、人間の本質は、今も100年前もまったく変わっていません。

こんな時代だからこそ、青少年のための科学の祭典が担う役割は、益々大きくなると考えます。自分の目で見て確かめ作って試すことは、子どもたちに、科学の楽しさや面白さを感じ取ってもらい、考える喜びや感動を与えます。この祭典は、ただ見て聞くだけではなく、自分で考えて行動することを大切にしています。単に「知の蓄積」に終始するのではなく、科学の本質である、探究や創造のプロセスそのものを楽しんでほしいと思います。本大会を通じて、富山県の未来を担う子どもたちが、理科や科学技術の楽しさ、面白さを学び、将来の夢や目標を見つけることを期待しています。

「'23 青少年のための科学の祭典」黒部大会・
第30回「おもしろ科学実験 in 富山」実行委員会
会長 木下 正博（富山県総合教育センター）